The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | かけらをふちどる ： フラグメントロギー再考 |
| Author(s) | 高原, 耕平 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 270-279 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68194 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# かけらをふちどる：　フラグメントロギー再考

高原耕平

「ツナミの後で」に書ききれなかったのだけれど、タイでひとりの女性からこのようなことを聞いた。ツナミのすぐあと、そのひとが家族を探しにもどると、家のそばで彼女の母親が見つかった。生きていた。このおばあさんは自分の孫たちを（つまりわたしに話をしてくれた女性のこどもたちを）両脇で懸命に抱えていた。けれども波は腕から孫たちを奪った。おばあさんと娘は生き残り、幼い孫二人は亡くなった。

おばあさんはその後どう過ごしていたかとこの女性に問うた。「その後、海には決して近づかなかった」と彼女は答えてから、「いや、まったく行かなかったのではなくて、ちょっと行ってから、すぐ戻る、ということを繰り返していた」と言い直した。

わたしはこのことを聞いて、なにか生身のものに触れてしまった気がした。おばあさんのくりかえしくりかえしの往還運動のなかへ取り込まれてゆくような気持ちになった。海へゆかぬこともできず、そこにたたずむこともできない。ツナミを生き延びてから後に亡くなるまでの７、８年間、浜への往復をくりかえす。そうするほかない、という営みをわたしはじっとりと理解することはできない。けれども、ありうることだとおもった。

このノートでは、人間が静けさの中でいとなむ、こうしたいろいろな方法（メチエ）をすこしだけ集めてみたい。ものごとをあまさず捉え、すみずみまで明晰にしてゆく方法論ではなくて、小さな破片や断片をできるだけそのまま受けとめるための技法の、いくつかの手がかりとして。

＊＊＊

研究という営みが一般に得意とするのは、まっすぐ進む、という方法である。

哲学をふくめて、現代のおそらくほぼ全ての「研究」活動では、問いの核心に直行することが期待されている。巨大な研究プロジェクトであれ、学生の期末レポートであれ、到達すべき目標と、そこに至るための方法が明確に示される。役割分担、予算の使途、時間·空間上の予定が計画に書き込まれ、さらに外部からの承認と批判のプロセスが組み込まれる。こうして、研究者は目標地点へ向けて漸進してゆく。

なるほど予定外の失敗や偶然の発見といったことも少なからず生じる。目標そのものの変更もまれではない。けれどもそれらはあくまでひとつのエピソードにすぎず、計画終了後に全体像を俯瞰してみれば、やはりある核心部へ向かって研究者は直行していた。

論文も同じ構造によって書かれ、読まれる。問いの所在が提示され、扱うデータの範囲と方法論が確認される。寄り道や枝葉は論述から可能な限り切り落とされるか、脚注に押し込まれる。さくさくと論点を片付けてゆくか、それともねちねちと真相へにじり寄ってゆくかという違いは書き手の個性だけれども、いずれにせよ、書かれるべき「それ」へとまっすぐ論述は流れ込む。書き手と読み手はそこへ踏み込む。

しかし、ある核心へ直行して、そこへ踏み込んで全てが完了する、という営みは、人間の生のなかではごく特殊なケースであるようにも思える。この直行の営みを、たとえば「新快速米原ゆき」型とか、あるいは道中で偶然の出会いを持ちつつも敵地へ乗り込んで物語を終える「桃太郎」型と呼んでおく。新快速で鬼ヶ島に乗り付けて（三宮·芦屋·尼崎でそれぞれ犬·猿·キジと合流する）征服が完了するような研究プロジェクトや論文は、ひとつの理想形である。けれども人間のからだやあたまは、おおまかなかたちとしては、そうした一直線急襲に特化しているわけではないだろう。むしろ、うろたえる、うろうろする、とりみだす、くりかえす、どっちつかずのまま引き

裂かれるのを待っている、といった在り方のほうが多いかもしれない。そこにだって、真理のかけらはあるだろうに。

＊＊＊

あるいは、迂回する、という仕方もある。

在日韓国人詩人・金時鐘は、約半世紀ぶりに帰郷した済州島（チェジュ島）で、巫女（クッ）による神訪（シンバン）を執り行う。巫女の体に、詩人の叔父の魂が降りる。

**金時鐘**　その後、私が身を潜めて匿ってくれていた区長の叔父貴が武装隊（ムジャンデ）の竹槍で殺されて、その家に潜んでいること自体が生き地獄やったの。（…）いつか親父お袋へのお詫びと、山部隊に殺された叔父さんの霊を慰めたいという思いがずっとあって。（…）

**文京洙**　それで、済州島でクッをされた？

**金時鐘**　はい。済州島を訪問した際に神房をお願いできないかと思った。（…）

**金石範**　だけど、神房して気持ちがちょっとは晴れたやろ。

**金時鐘**　晴れたって、本当に救われた。神房は六時間くらいかけてやるんだ。うちの母方の親戚もほとんど来て、その叔父貴の長男の兄貴も一家挙げて来てくれていた。祭礼の儀式が終わったあとに声をかけてくれたんや。それに救われた。僕の手を握って「シジョンイタスンアニナン（時鐘のせいじゃないから）」。

**金石範**　「時鐘のせいじゃない」というわけや。

**金時鐘**　「アボジウンミョンイヨシナン（親父の運命だったんだから）」、「クロンシデヨシナン（そういう時代だったんだから）」と繰り返しながら涙ぐんでくれていた。

（金石範・金時鐘(文京洙編)『なぜ書きつづけてきたか　なぜ沈黙してきたか　済州島四・三事件の記憶と文学〔増補〕』平凡　社ライブラリー、2015年、pp.205-207）

叔父と両親への、あるいは島の死者と歴史そのものへの詩人の悔

恨は、逃亡先の日本で沈黙を守ることだけでは、ほどけない。儀式を介するということがどうしても必要だった。まっすぐに祈り、赦しを乞うことも人間には許されている。けれども、精神が精神にそれのみで直接触れようとするとき、外部から切り離された孤独な精神が自らの内側へ解決を取り込もうと試みるとき、精神は時間から蒸留され分離されてしまう。これこそが最後の確信と思うとき、精神は次の「しこり」を繰り延べさせている。

直接つかめないものへ、迂回することで出会う。そういう仕方がある。クッを介して叔父の魂と再会する。6 時間の儀式を終えてから「あなたのせいではない」と手を握られる。あるいはまた、脱出した日本での数十年の生活を経て島に戻る。何かに媒介されることで初めて「救われる」ことがありうる。

＊＊＊

そこへ近づいてみてはすぐに引き返す。迂回する。媒介を通じて出会う。核心部へ直行するのではない在り方。

否定神学という語り方が西洋の知の伝統にあるけれど、これはどうだろうか。人智を超えた神の存在については、「それはこれこれのものである」とポジティブに宣言することはできず、ただ「それではないもの」という否定の語り方を重ねるほかない、という態度である。近い時代のものでは、ハイデガーの『存在と時間』における「不安 Angst」の描写がそれに類するかもしれない。ハイデガーは、「恐れ」は世界内部の存在者がその対象であるが、「不安」はそうではないという。対象がつかめないまま、しかし着実にじりじりと息を締め付けてくる気分、気散じして振り払えばすぐに後退するけれども決して自分の存在からすっきり剥がれることはない気分が「不安」である。かれは人間が世界と可能性を持つ存在であることを不安は明らかにしているという存在論的な分析に進み、不安のひだを細かく描き出すことはしない。それだけに、かえって不気味にその

気分が読者にほのめかされる。
　それではない、これでもない、しかしそれはやはりそれなのだ……という否定神学の語り方は、たしかに核心部へ直行しないという在り方のひとつかもしれない。現代の諸学問領域においては、哲学も含めて、こうした否定神学的な論述は基本的に許されていない。実証の照明弾を世界の暗部へどしとしと撃ち込んでゆく仕方しか選べないのは、どこかもったいなくもある。
　ただ、このようにもおもう。否定神学的な語り方は、どことなく強烈な性質がある。形式の上ではなるほど核心部を表現しない。けれども、それはあれではない、それはこれでもない、という否定を連ねることは、かえって強烈に「それ」の核心へ読み手を急き立てる。否定を重ねるリズムに乗ってしまうと、核心への神秘的合一から逃げられなくなる。

＊＊＊

　PTSD（心的外傷後ストレス障害）の主要な症状はしばしば「回避」「侵入」「過覚醒」とまとめられる。これらのうち、「回避」は外傷的体験に関連する場所や物事を避けて行動してしまうこと、「侵入」は悪夢やフラッシュバックという仕方で外傷的体験が生々しくまた制御できずにその人の意識へ出現することである。回避は過去が未来を病的に規定すること、侵入は過去が現在を病的に規定すること、と要約できるかもしれない。
　侵入において、病者は核心部へ（つまり外傷的体験そのものへ）直行するというよりは、すでにその内部へ瞬時に連れ去られ、投げ込まれている。回避では、体験を思い起こさせるものから強いて離れようとすることでかえって自らをそこに差し向けている。いずれにしても、自由は奪われていて、直行することも引き下がることもできない。
　こうした状況に対する専門的な治療法として行われる「持続的暴

露療法」は、核心となる体験へじりじりと漸進させながら、体験の、不安や恐怖を伴う生理的再生を、安全な「記憶」へと転換させる作業であるといえるかもしれない。外傷的体験が現在と未来を支配している限り、そのひとの時間は自由なものではない。暴露療法では治療者と共に体験の核心部へ少しずつ時間を挟んでゆくことで、それを記憶に転換する。時間と自由が取り戻される。

核心部へ新快速的に直行することができるためには、自分がその目標地点から離れているということ、なおかつ自由であること、目標への直行が自分の時間のもとで遂行できることが必要である。

＊＊＊

まっすぐにたどり着くことがどうしてもできないものごとは、なめらかなことばにするのが難しいことでもある。桃太郎が鬼ヶ島で鬼たちを切り伏せたという征服譚は明瞭に言語化され、そこで「きり」がつく。めでたし、めでたし。一方、島を追われて流浪する鬼たちの物語があったとすれば、それはひどく混乱した、弱々しくて、断片化された伝承というかたちをとらざるをえないだろう。

ひとりの人間の場合はどうだろうか。「きり」のつかなさに沿ってゆく方法として、たとえば日記という書き取り方もある。

**10 月 28 日**

マムの遺体をはこんでゆく。パリからユルトへ（JL と搬送業者がいっしょだ）。ソリニー（トゥールをすぎたところ）で、昼食をとるためにごく小さな大衆的カフェに立ち寄る。搬送業者は、そこで偶然に「仲間」（オート＝ヴィエンヌに遺体をはこんでいる）に会い、いっしょに昼食をとる。わたしはジャン＝ルイと、広場（おぞましい死者記念碑がある）のほうにすこし歩く。踏み固められた地面、雨のにおい、うらぶれた田舎。とはいえ、生活意欲がおこるように（雨のやわらかな匂いのせいで）、まったくはじめて、意気阻喪を感じた。

ごくみじかい痙攣のように。

**10 月 29 日**
―奇妙なことだ。あれほどよく知っていた彼女の声がきこえてこない。思い出のきめそのものだと言われる彼女の声が（「あのなつかしい語り口……」）。局所的難聴のように……。

**10 月 29 日**
「彼女はもう苦しんでいないのだから」という文で、「彼女」とは何を、誰をさしているのか？　この現在形はどういうことなのか？
（ロラン・バルト（石川美子訳）『喪の日記』みすず書房、2009 年、pp.15-17）

　これはロラン・バルトが母の死の直後から書き始めた日記である。わたしがいまこれを読めるのは後世の研究者の編纂のおかげだけれど、書いている当時の著者は、それを他人に見せることや翻訳されることは全く想像していなかっただろう。かれはただ書きつける。その中身はさまざまで、遺体の搬送業者が同業者と出くわすといった、外部の読み手には戸惑うような出来事も含まれている。何を書くのかということに関して、通常の書き物とは異なる基準や衝動がある。つまり私的な記述なのだけれど、それは外部の読み手をけっして拒まない。私的であるのに、読み手は次第にバルトの指先の、ペンの動きにじぶんを同期させてゆくことができる。かれは喪失の悲しみに沈みきっているようでもあるし、その様子を外から冷静に観察しているようでもある。その振り子のような揺れは、海に近づいては遠ざかることを繰り返す、タイの漁村のおばあさんの営みにすこし似ているかもしれない。一日ずつ日記を書きつけてゆくという行為には、明確な目標は無い。明確な「きり」も無い。けれどもそれは確かに、明確な目標と手順のもとに経験を組織化するのとは違う仕方で、体験に時間と言葉を染み渡らせてゆくやりかたである。

＊＊＊

あちこち出かけていると、ぱちりと答えられないことばに出くわすことがある。2015 年の夏、わたしは宮城県南三陸町志津川での大規模なインタビュー・プロジェクトに参加していた。旅程の最終日、わたしは別地域へ移動する院生と教員たちの車を旅宿の玄関先で見送り、別の教員を待っていた。見送りにはその旅宿の従業員のおばさんたちも 3 人立ってくれた。

どこから来たの、と 3 人のうちのひとりに聞かれた。大阪からです、と答えた。ああ、なにか大学の調査とか研究の。あ、はい、志津川小の避難所の様子をみなさんにお聞きしていて。ああ、はいはい。……といったやりとりをぼそぼそとしていると、わたしたち 3 人ともみんな母親流されたよ、と突然告げられる。

それは不思議な瞬間で、こちらは「えっ」と「うぐぐ…」がかろうじての当座の反応になってしまうが、向こうはそれを拒絶するのでもない。激しい感情を噴き出させるのでもなく、強いて明るく振る舞うのでもない。わたしの同情や調査の対象となることを求めているのでもない。深い意味を秘めた一言がついに開示される瞬間というのではなく、ただ目の前のひとの事実だけがぽかんと声に出されている。わたしははっきりした答えを求められているわけではなく、ただ事実を告げられたにすぎないけれど、突然告げられたということそれ自体が大きな問いかけのように迫ってきて、何も答えられない。

これも「ツナミの後で」に書かなかったことだけれど、あるとき「トイ＝センセイ」の車で、孤児院のスタッフのひとりの家へ行った。土砂降りの赤土の峠道の合間の小さな家にそっと入らせてもらうと、そのスタッフに、20 歳前後であろうか、壁に貼られた若い女性の写真を指さされた。娘さんだということだった。そしてスタッフは指で天を指し、なんだかはにかむようなはしゃぐような表情で「パイ・レーオ（行った）」と言った。トイ＝センセイが「この子は

先月亡くなった」と補足した。わたしは面食らった。なぜ、素性のしれない、ことばのほとんど通じない異邦人に、自分のこどもの死をあっさりぽかんと言ったのだろうか。ここでもやはり、彼女はただ事実を告げただけで、何も求めていない。わたしは何も求められていないけれど、突然語られたことばに戸惑う。

ほかにもいくつか思い出すことがあるけれど、似た例を重ねることになるので書かない。いつも彼女らに予想外のタイミングで突然告げられ、わたしはふっと息を吸ってそのまま答えることができない。回り道の仕方を探っている一方で、目標の核心の方がこちらにショートカットして飛び込んで来て、応接する間もなく去ってゆく。うまく答えられなかった、取り逃がしてしまったという悔みがこちらに生まれるが、彼女らの側では、かならずしも強引につかまえて欲しかったわけでもなかった、かもしれない。そのようなことばがある。

この、ぱちりと答えられないことばに突然ゆきあたって、聞いたそのまま時間のぜんまい構造が間延びするようなぎゅっと縮こまるような出来事を、どう考えればよいのか、わからない。

それは「対話」とは呼びづらい。答えに詰まってしまっているうちに、すぐに次の話題に移ってしまう。「ライフ・ストーリー」でもない。彼女らはたしかに自分の身に起きた出来事のひとつを話したのだけれど、「ものがたる」という強い営みではなかった。むしろ、対話や物語といったスタイルに絡み取られないような仕方を選んでいたようにもおもえる。深い意味や共感を引き出すためではなく、ただ断片を断片として、断片のままに受け取らせるという方法である。

＊＊＊

ほかにもいろいろな方法がある。思いつくものを全て書いてしまうのも芸が無いことなのでやめておく。多くの方法はすでに学ばれ

て声と体のなかに保たれている。けれども、わたしはしばしばそれを忘れる。だから、ときどきこのように改めて文章にする。

（たかはらこうへい）